

令和 7 年度

比較文化研究所 研究員研究発表会

会 場

久留米大学 御井学舎 御井本館 4 階

140 教室

日 時

令和 8 年 2 月 20 日 (金)

14:00～15:25



令和7年度 比較文化研究所 研究員研究発表会 (R08.2.20)

プログラム

-
1. 開会挨拶 14:00~14:05
 2. 研究発表 14:05~15:20
 3. 閉会挨拶 15:20~15:25
-

研 究 発 表

(御井本館 4 階 140 教室)

座長：原口 雅浩

時間・ベル：星野 聡美

< 発 表 演 題 >

No.	時 間	発表者
1	14:05~14:30	許 東升
中国の東北地方における認知症高齢者を取り巻く現状と課題		
2	14:30~14:55	小田村 悠希
障害者支援施設における生活支援員の人材要件に関する考察		
3	14:55~15:20	ガーダ・アブディルカリーム
アラビア語母語話者を対象とした日本近代詩教育の理論と実践		

中国の東北地方における認知症高齢者を取り巻く現状と課題

許 東升 (久留米大学比較文化研究所 研究員)

キーワード：中国 東北地方 認知症 高齢者

I. 研究目的

中国では、2000 年に 65 歳以上の高齢者人口を総人口の 7%を占め、高齢化社会に突入してから、早いスピードで高齢者化を進めており、2014 年に 14%を超えて、2035 年前後に 21%と見込まれている。一方、「中国統計年鑑 2025」によると、東北地方の平均高齢化率は約 20%、全国の平均高齢化率の 15%を大きく上回っている。深刻な高齢化問題と伴ってくるのは認知症高齢者の問題である。Liang ら（2026）のレビューおよびメタ分析結果によると、東北地方の認知症有病率は 13.66%と報告し、この結果は Jia ら（2020）全国の認知症の発症率約 6%より著しく高い。また、かつては重工業の拠点であり、「共和国長男」として栄えた東北地方が、改革開放以降に産業構造改革の影響を受け、経済発展が停滞するとともに、人口流出や少子化問題もかなり深刻となっている。そのため、現在は中国における「未富先老（豊かになる前に老いる）」の典型的な地域である。そこで、本研究は複数の大きな課題を抱える中国の東北地方における、認知症高齢者の現状を明らかにし、課題を検討していきたい。

II. 研究方法

本研究は、文献研究である。今後も継続的に、中国における認知症高齢者を取り巻く環境および認知症ケア体制の構築に向ける基盤研究である。

III. 結果

1978 年末から改革開放に伴う市場経済化を進めつつ、経済発展の中心も沿海都市等に移転し、東北地方の経済発展が停滞し始めた。この影響を受けて、労働人口は急速的に経済発達の地域および国外に移動した。これにより、大きな社会扶養負担と少子化問題も加速している。また、こうした状況の中で、高齢者および認知症高齢者の介護は主にその家族が担っている。

一方、急速的に発展している高齢者の認知症問題の対応に対して、政府は認知症高齢者の長期ケア保険の創設や 2030 年までに、100 ベッド以上設置する高齢者施設に、認知症ケアスペースを設置すると命じている。また、認知症の早期スクリーニング検査の推進および黄色いブレスレットの無料配布を推進している。しかし、在宅ケアが中心とする認知症高齢者への支援体制の整備がまだできていない現状である。

IV. 考察

貧困および儒教思想の影響が最も深い東北地方における高齢者および認知症高齢者のケアは、家族を中心でやっており、家族の方がかなり大きな身体および経済的な負担を抱えている現状である。特に、人口流出により、老老介護問題は顕著化となっている。また、一人っ子政策により、一人の子供が老親二人をケアする問題も、これから東北地方および中国全国の最も大きな課題となっている。これに対して、在宅ケア支援体制の構築がもっとも重要であると考えられる。

一方、政府は公的支援体制に取り組んでいるが、実際の問題の緩和効果をさらに検討する必要がある。

V. 参考文献

- 1.HongLiang J, XiaJia R, YingQuan W.,et al.(2026). Prevalence, trends and distribution of dementia among older adults from 1990 to 2023 in China: A comprehensive systematic review and meta-analysis.International Journal of Nursing Studies.173.1-15.
- 2.Longfei J, Du Y, Chu L, et al.(2020). Prevalence, risk factors, and management of dementia and mild cognitive impairment in adults aged 60 years or older in China: a cross-sectional study, The Lancet Public Health, 5(12),661-671.

障害者支援施設における生活支援員の人材要件に関する考察

小田村 悠希（久留米大学比較文化研究所 研究員）

キーワード 障害者支援施設 生活支援員 人材要件 障害者総合支援法

1. 研究背景と目的

障害当事者への福祉サービスの提供について規定している根拠法として、障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律（以下、障害者総合支援法）がある。障害者総合支援法に基づき、在宅や施設で生活を営む障害当事者への多様な福祉サービスの提供が行われている。

筆者は生活支援員の立場で、知的障害者を対象にした施設入所支援や日中活動支援、障害者グループホームでの生活支援を行っている。また、障害者支援施設における生活支援員のキャリア形成の特性やあり方に着目した研究に取り組んでいるが、その過程で、生活支援員に求められる人材要件（どのような人材が求められているのか）を整理することで、キャリア形成の特性及びあり方に関する研究の足がかりになると考えた。

本研究は、障害者支援施設で勤務している生活支援員に求められる人材要件について、一定の整理を行うことを目的とする。

2. 研究方法

本研究は主に先行研究を中心とした文献研究である。

3. 倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会研究倫理規定を遵守したうえで実施している。

4. 結果および考察

CiNii Research で「生活支援員 要件」のキーワードで文献検索を試みると、4 件がヒットした（2026 年 2 月 10 日時点）。しかし、本研究のテーマに合致した研究は見当たらなかった。小田村（2023）は知的障害者グループホームの世話人と生活支援員の採用要件について調査研究を行っているが、その結果のなかで、事業者側が生活支援員に求める資質として、「入居者との良好な関係を築くことができる」ことを最も重視していた。続いて、「他の職員と連携して入居者の支援ができること」、「健康で、継続してグループホームでの勤務が可能であること」を求めている。

上記の先行研究は知的障害者グループホームの内容ではあるが、結果を改めて整理すると、障害当事者との関係構築やチームワークを大切にできることを前提としたうえで、長期的な勤務を望んでいることが重要視されているといえる。このことは、障害者支援施設の生活支援員にも当てはまる結果ではないかと考える。

5. まとめ

生活支援員は福祉に関する経験や資格について、明確な要件を定められていない。しかし、経験や資格

以上に、生活支援員の「人柄（人間力）」を重視した採用の傾向が強いといえる。特に、長期的な勤務の継続は、生活支援員のキャリア形成においても必要な要素の一つであると推察される。

生活支援員のキャリア形成や人材要件に関して焦点をあてた先行研究は極めて乏しいのが現状であるため、障害者支援施設の生活支援員に対する調査研究が必要であると考え。具体的にはインタビュー調査を検討しているが、本研究を通して、障害者支援施設の生活支援員として求められている人材要件についても調査することで、キャリア形成に対する考え方などに差異が生じるのではないかと推察している。

6. 参考文献

WAM NET（ワムネット）「生活支援員」（https://www.wam.go.jp/content/wamnet/pcpub/top/fukushiworkguide/jobguide/jobtype/jobguide_job21.html）（最終アクセス日：2026年2月10日）

小田村悠希（2023）「知的障害者グループホーム職員の採用要件と雇用確保：世話人及び生活支援員の現状に焦点をあてて」『福岡県社会福祉士会研究誌』（12），25-37.

アラビア語母語話者を対象とした日本近代詩教育の理論と実践

Ghada Abdelkareem (久留米大学比較文化研究所 研究員)

キーワード：日本近代詩 日本語教育 日本文学教育 アラビア語母語話者 異文化理解 詩教育 実証研究

1. 緒言・目的

近年、アラビア語圏における日本語教育は、実用的言語能力の習得にとどまらず、日本文学・文化を深く理解する人材育成へと発展している。しかし、日本語教育課程において文学、とりわけ詩は「難解」「非実用的」と捉えられ、十分に活用されてこなかった。

日本近代詩は、口語自由詩や短歌の革新を通じて、日本語表現の柔軟性、象徴性、音韻美を集約的に体现しており、高度な言語能力と文化理解を同時に育成し得る教育素材である。

本研究は、エジプトの大学において日本語・日本文学を専攻するアラビア語母語話者の学生を対象に、日本近代詩教育の理論的意義と実践的効果を明らかにすることを目的とする。特に、詩的言語表現を通じて、①日本語の読解・表現能力、②日本文学・文化への内面的理解、③異文化コミュニケーション能力がいかに深化するかを検討する。

2. 研究方法

本研究では、文献研究と教育実践を想定した質的分析を用いる。教材として、萩原朔太郎、北原白秋、石川啄木、宮沢賢治の詩作品を取り上げ、日本近代詩史における代表性、言語的分析可能性、異文化比較への適合性という観点から選定した。

各詩人の作品について、内面表現、音韻美、平易な言語による社会意識、自然観と倫理的価値といった特徴を分析し、それらがアラビア語母語話者の日本語学習者に与える教育的効果を検討する。さらに、音読、語彙・表現分析、文化背景の解説、短詩創作などを組み合わせた授業モデルを想定し、日本近代詩教育の実践的有効性を考察する。

3. 考察・結論

考察の結果、日本近代詩は、アラビア語母語話者の日本語学習者に対して高い教育的親和性を持つことが明らかとなった。萩原朔太郎の詩は内面表現を通じて近代的自我への理解を促し、北原白秋の詩は日本語の音韻美とリズムを身体的に体験させる。石川啄木の短歌は平易な言語によって社会意識を可視化し、宮沢賢治の詩は自然観と倫理的普遍性を通じて文化的共感を生み出す。

以上より、日本近代詩教育は、言語能力・文学理解・文化的コミュニケーション能力を統合的に育成する有効な教育手法であると結論づけられる。本研究は、国際的日本語教育における文学・詩教育の可能性を示すものであり、今後は実際の授業実践を通じた実証的検証が求められる。